聖經

甘露の法雨

聖經

甘露の法雨

招神歌

生きとし生けるものを生かし給へる御祖神元津靈ゆ幸へ給へ。
吾が生くるは吾が力ならず、天地を貫きて生くる祖神の生命。
吾が業は吾が爲すにあらず、天地を貫きて生くる祖神の權能。
天地の祖神の道を傳へんと願れまし〻生長の家大神守りませ。

甘露の法雨

雅春書

『七つの燈臺の點燈者』の神示

○

汝ら天地一切のものと和解せよ。天地一切のものとの和解が成立するとき、天地一切のものは汝の味方である。天地一切のものが汝の味方となるとき、天地の萬物何物も汝を害することは出來ぬ。汝が何物かに傷けられたり、黴菌や惡靈に冒されたりするのは汝が天地一切のものと和解してゐない證據であるから省みて和解せよ。わ

れ當て神の祭壇の前に供へ物を献ぐるとき先づ汝の兄弟と和せよと教へたのはこの意味である。汝らの兄弟のうち最も大なる者は汝らの父母である。神に感謝しても父母に感謝し得ない者は神の心にかなはぬ。天地萬物と和解せよとは、天地萬物に感謝せよとの意味である。本當の和解は互ひに悔へ合つたり、我慢し合つたりするのでは得られぬ。悔へたり我慢してゐるのでは心の奥底で和解してゐぬ。感謝し合つたとき本當の和解が成立する。神に感謝しても天地萬物

に感謝せぬものは天地萬物と和解が成立せぬ。天地萬物との和解が成立せねば、神は助けたうても、爭ひの念波は神の救の念波を能う受けぬ。國恩に感謝せよ。汝の父母に感謝せよ。汝の夫又は妻に感謝せよ。汝の子に感謝せよ。汝の召使に感謝せよ。一切の人々に感謝せよ。天地の萬物に感謝せよ。その感謝の念の中にこそ汝はわが姿を見、わが救を受けるであらう。われは全ての全てゞあるからすべてと和解したものゝ中にのみわれはゐる。われは此處に見よ、

彼處に見よと云ふが如くにはゐないのである。だからわれは靈媒には憑らぬ。神を靈媒に招んでみて神が來ると思つてはならぬ。われを招ばんとすれば天地すべてのものと和解してわれを招べ。われは愛であるから、汝が天地すべてのものと和解したとき其處にわれは顯れる。（昭和六年九月二十七日夜神示）

○

時が來た。今すべての病人は起つことが出來るのである。最早、

あなたにとつて病氣は存在しない時が來たのである。二千年前、キリストが『汝の信仰によつて汝の信ずる如くなれ』と云ふ唯一語で、遠隔の地にゐる病人を癒やした其の眞理が、すべての人類に開顯される時期が來たのである。『生長の家』を讀み眞理を知るだけで遠くにゐて病氣が治る事實を見よ。『生長の家』は今かの默示錄が予言した『完成の燈臺』として人類の前に臨むのである。此の燈臺より眞理の光を受くるものは、創世記のエデンの樂園追放以後人類を

悩ましたところの『罪』と『病』と『死』との三暗黒を消盡するのである。光が近付くときすべての暗黒は消える。『眞理』が近づく時、すべての『迷』が消える。『迷』が消える時、『迷』の產物なる『罪』と『病』と『死』とは消える。疑はずに吾が光を受けよ。われは『完成の燈臺』に燈を點ずるものである。（昭和六年一月十五日神示）

聖經

甘露の法雨

神

或る日天使生長の家に來りて歌ひ給ふ――

創造の神は
五感を超越してゐる、
六感も超越してゐる、

聖(せい)
至上(しじやう)
無限(むげん)
宇宙(うちう)を貫(つらぬ)く心(こゝろ)
宇宙(うちう)を貫(つらぬ)く生命(せいめい)
宇宙(うちう)を貫(つらぬ)く法則(はふそく)

眞理(しんり)
光明(くわうみやう)
智慧(ちゑ)
絶對(ぜったい)の愛(あい)。
これらは大生命(だいせいめい)——
絶對(ぜったい)の神(かみ)の眞性(しんせい)にして

神(かみ)があらはるれば乃(すなは)ち
善(ぜん)となり、
義(ぎ)となり、
慈悲(じひ)となり、
調和(てうわ)おのづから備(そな)はり、
一切(さい)の生物(せいぶつ)處(ところ)を得(え)て爭(あらそ)ふものなく、

相食(あひは)むものなく、
病(や)むものなく、
苦(くる)しむものなく、
乏(とぼ)しきものなし。
神(かみ)こそ渾(すべ)ての渾(すべ)て、

神は渾てにまましまして絶對なるが故に
神の外にあるものなし。
神は實在のすべてを蔽ふ。
存在するものにして
神によつて造られざるものなし。

神が一切のものを造りたまふや
粘土を用ひ給はず、
木材を用ひ給はず、
槌を用ひたまはず、
鑿を用ひたまはず、
如何なる道具も材料も用ひ給はず、

たゞ「心」をもつて造りたまふ。

「心」はすべての造り主、

「心」は宇宙に滿つる實質、

「心」こそ「全能」の神にして遍在したまふ。

この全能なる神、

完全なる神の
『心』動き出ててコトバとなれば
一切の現象展開して萬物成る。
萬物はこれ神の心、
萬物はこれ神のコトバ、
すべてはこれ靈、

すべてはこれ心、
物質にて成るもの一つもなし。
物質はたゞ心の影、
影を見て實在と見るものはこれ迷。
汝ら心して迷に捉はるゝこと勿れ。

汝ら『實在』は永遠にして滅ぶることなし。
『迷』は須臾にして忽ち破摧す。
『實在』は自在にして苦惱なし
『迷』は捉はれの相にして苦患多し。
『實在』は眞理、
『迷』は假相、

實在は五官を超越し
第六感さへも超越して
人々の感覺に映ずることなし。

感覺はこれ信念の影を視るに過ぎず。
汝ら靈眼を備へて靈姿を視るとも

實在を視たるに非ず、
感覺にて視得るものは
すべて心の影にして第一義的實在にあらず、
靈姿に甲乙あり、
病める靈あり、
苦しめる靈あり、

胃袋もあらざるに胃病に苦しめる靈あり、
心臟も有たざるに心臟病にて苦しめる靈あり、
これすべて迷なり。
斯くの如き靈、人に憑れば
憑られたる人或は胃病を顯はし、
或は心臟病を顯はす。

されど靈覺に映ずる
さまゞの苦しめる靈は、
第一義的實在にあらず、
彼らは誤れる信念によりて
流轉せる迷の影なり。
迷ひ迷ひて流轉せる心は

その信念が形となりて假の相を現ずべし。

されど如何に相を現ずるとも

假相は永遠に假相にして實在となることを得ず。

汝ら、實在にあらざる物を恐るゝこと勿れ、

實在にあらざる物を實在せるが如く扱ふこと勿れ。

實在にあらざる物には實在をもつて相對せよ。

眞にあらざるものには眞をもつて相對せよ。
假相に對しては實相を以て相對せよ。
闇に對しては光をもつて相對せよ。
非實在を滅するものは實在のほかに在らざるなり。
假相を破るものは實相のほかに在らざるなり。
虛妄を壞するものは眞理のほかに在らざるなり。

闇の無を證明するものは光のほかに在らざるなり。
彼らに生命の實相を敎へよ。
彼らに生命の實相が神そのものにして完全なる事
を敎へよ。
神はすべてなるが故に
神は罪を作らざるが故に

神のほかに造り主なきが故に
此の世界に犯されたる罪もなく
報いらるべき罪もなきことを教へよ。
三界の諸靈
三界の諸生命
この眞理を觀じ、

この眞理をさとりて、
一切苦患の源となるべき
顛倒妄想を摧破すれば、
天界の諸神ことごとく眞理の合唱を雨ふらし、
現世の生命ことごとく光りを仰ぎ、
惑障ことごとく消滅し、此世はこの儘にて光明

世界を示現せん。

物質

汝ら感覺にてみとむる物質を實在となすこと勿れ。物質はものの實質に非ず、生命に非ず、

眞理にあらず、
物質そのものには知性なく
感覺なし。
物質は畢竟『無』にしてそれ自身の性質あることなし。
これに性質を與ふるものは『心』にほかならず。
『心』に健康を思へば健康を生じ、

『心』に病を思へば病を生ず。

そのさま恰も
映畫の舞臺面に
力士を映せば力士を生じ
病人を映せば病人を生ずれども、
映畫のフイルムそのものは

無色透明にして本來力士も無く
病人も無く
たゞ無色透明の實質の上を蔽へる
印畫液によりて生じたる色々の模樣が、
或は力士の姿を現じ、
或は病人の姿を現ずるが如し。

されど健康なる力士も
虚弱なる病人も
印畫液の作用によりて生じたる
影にして實在に非ず。
汝ら若し活動寫眞の映寫機に
印畫液によりて生じたる色々の模様なき

無色透明のフイルムをかけて
舞臺面にこれを映寫すれば、
やがて老いて死すべき健康なる力士もなく
虚弱なる病人は無論なく
たゞ舞臺面にあるものは光明そのもの、
生命そのものにして

赫灼として照り輝かん。

汝ら今こそ知れ、

汝らの『生命』は健康なる力士の生命以上のものな

ることを。

如何なる健康なる力士も

彼が肉體を實在と觀、

肉體即ち彼なりと觀る以上は
彼は滅ぶる者にして眞の『健康』に非ざるなり。
眞の『健康』は物質に非ず、肉體に非ず、
眞の『生命』は物質に非ず、肉體に非ず、
眞の『汝そのもの』は物質に非ず、肉體に非ず。
物質の奥に、

肉體の奥に、
靈妙きはまりなく完全なる存在あり。
これこそ神に造られたる儘の完全なる『汝そのもの』にして、
常住健康永遠不滅なる『生命』なり。
汝ら今こそ物質を超越して

汝自身の『生命』の實相を自覺せよ、

實在

天使また續いて說き給はく——

實在はこれ永遠、

實在はこれ病まず、

實在はこれ老いず、

實在はこれ死せず、
この眞理を知ることを道を知ると云ふ。
實在は宇宙に滿ちて缺けざるが故に道と云ふ。
道は神と俱にあり、
神こそ道なり、實在なり。
實在を知り、實在に住るものは、

消滅を超越して
常住圓相なり。

生命は生を知つて死を知らず。
生命は實在の又の名、
實在は始めなく終りなく、

滅びなく、死なきが故に、
生命も亦始めなく、終りなく、
亡びなく、死滅なし。
生命は時間の尺度のうちにあらず
老朽の尺度のうちにあらず、
却つて時間は生命の掌中にあり。

これを握れば一點となり、
これを開けば無窮となる。
若しと思ふ者は忽ち若返り、
老いたりと思ふ者は忽ち老い朽つるも宜なるかな。
空間も亦決して生命を限定るものにはあらず、
空間は却つて生命の造りたる「認識の形式」にすぎず、

生命は主にして空間は従なり。
空間の上に投影されたる
生命の放射せる觀念の紋、
これを稱して物質と云ふ。
物質は本來無にして
自性なく力なし。

これに性質あり、
また生命を支配する力あるかの如き觀を呈するは
生命が『認識の形式』を通過する際に起したる『歪み』
なり。
汝ら、この『歪み』に捉はれることなく、
生命の實相を正觀せよ。

生命の實相を知る者は
因縁を超越して生命本來の歪みなき圓相的自由を
獲得せん。

智慧

智慧はこれ本來神のひかり、
實在に伴ふ圓相的光なり、

それは無量光、無邊光にして局限なし、
局限なきが故に
一切のものに滿ちて
一切のものを照し給ふ。
人間は光の子にして常に光の中にあれば
暗きを知らず、

躓きを知らず、
罣礙を知らず、
かの天人が天界を遊行するが如く
また海魚が水中を游泳するが如く
光の世界に光に満たされ法悦に満たされて遊行す。

智慧はこれ悟りの光にして、
無明の暗を照破する眞理なり。
眞理のみ實在、
無明はたゞ悟らざる眞理にして
これを喩へば惡夢の如し。
汝ら惡夢を觀ることなかれ。

悟れば忽ち此の世界は光明樂土となり、
人間は光明生命なる實相を顯現せん。

神は無量光、無邊光の智慧、
かぎりなき善、
かぎりなき生命、

一切のものゝ實質、
また一切のものゝ創造主、
されば神は一切所に遍在し給ふ。
神は遍在する實質且つ創造主なるが故に
善のみ唯一の力、
善のみ唯一の生命、

善のみ唯一の實在、
されば善ならざる力は決して在ることなし、
善ならざる生命も決して在ることなし、
善ならざる實在も亦決して在ることなし。
善ならざる力即ち不幸を來す力は畢竟惡夢に過ぎず。

善ならざる生命即ち病は畢竟惡夢に過ぎず。
すべての不調和不完全は畢竟惡夢に過ぎず。
病氣、不幸、不調和、不完全に積極的力を與
へたるは吾らの惡夢にして、
吾らが夢中に惡魔に壓へられて苦しめども
覺めて觀れば現實に何ら吾らを壓へる力はなく

吾れと吾が心にて胸を壓へるが如し。
まことや、惡の力、
吾らの生命を抑へる力、
吾らを苦しむる力は
眞に客觀的に實在する力にはあらず。
吾が心がみづから描きし夢によつて

吾れと吾が心を苦しむるに過ぎず。

佛の道ではこれを無明と云ひ

神の道ではこれを罪と云ふ。

完全圓滿の生命の實相をさとらざるが故に無明

と云ふ。

完全圓滿の生命の實相を包みて顯現せしめざる

が故に罪けがれと云ふ。

無明

かく天使生長の家にて歌ひたまふ時、一人の天の童子あらはれて問ひを設けて云ふ。

「願はくは人々のために、人々のさとりのために、無明の本質を明かになしたまへ」と。

かく天使生長の家にて歌ひたまふ時、一人の天の童子あらはれて問ひを設けて云ふ。

「願はくは人々のために、人々のさとりのために、無明の本質を明かになしたまへ」と。

天使答へて云ふ——

無明はあらざるものをありと想像するが故に無明なり。

眞相を知らざるを迷と云ふ。

快苦は本來物質の内に在らざるに、物質の内に快苦ありとなして、

或は之を追ひ求め、
或は之より逃げまどふ、
かゝる顛倒妄想を迷と云ふ。
生命は本来物質のうちにあらざるに
物質の内に生命ありとなす妄想を迷と云ふ。
本来物質は心の内にあり。

心は物質の主にして、
物質の性質形態はことごとく心の造るところな
るにもかゝはらず、
心をもつて物質に支配さるゝものと誤信し
物質の變化に從つて
憂苦し懊惱し、

われとわが生命の圓滿完全なる實相を悟ること

を得ざるを迷と云ふ。

迷は眞實の反對なるが故に無明なり。

迷は實在に反するが故に非實在なり。

迷若し實在するものならば

迷より生じたる

憂苦も懊惱もまた實在ならん。
されど、迷は實在の虛なるが故に
憂苦も懊惱もたゞ覺むべき惡夢にして實在には
非ざるなり。

罪

『罪は實在なりや？』とまた重ねて天の童子は問ふ。

天使の答ふる聲聞えて曰く、

すべて眞實の實在は、

神と神より出でたる物のみなり。

神は完全にして、

神の造りたまひしすべての物も完全なり。

然らば問はん。汝は罪を以て完全となすや？

此の時天の童子答へて曰く――

『師よ、罪は完全に非ず』と。

天使また説き給ふ――

罪は不完全なるが故に實在にあらず、

病は不完全なるが故に實在にあらず、

死は不完全なるが故に實在にあらず、

汝ら神の造り給はざるものを實在となすなかれ。
在らざるものを惡夢に描きて恐怖すること勿れ。
罪と病と死とは
神の所造に非ざるが故に
實在の假面を被りたれども
非實在なり、虚妄なり。

我れは此の假面を剝いて
罪と病と死との非實在を明かにせんが爲に來
れるなり。
嘗て釋迦牟尼如來もこの爲に來りたまへり。
嘗てイエスキリストもこの爲に來りたまへり。
若し罪が實在ならば

十方の諸佛もこれを消滅すること能はざるなり。
イエスキリストの十字架もこれを消滅する事能
はざるなり。
されど汝ら幸ひなるかな、
罪は非實在にして迷の影なるが故に、
十方の諸佛も

衆生を攝取してよく罪を消滅したまへり。

イエスキリストも

たゞ言葉にて『汝の罪赦されたり』と云ひてよく

罪を消滅したまへり。

われも言葉にて

『生長の家の歌』を書かしめ、

言葉の力にて罪の本質を暴露して、
罪をして本來の無に歸せしむ。
わが言葉を讀むものは
實在の實相を知るが故に
一切の罪消滅す。
わが言葉を讀むものは

生命の實相を知るが故に
一切の病消滅し、
死を越えて永遠に生きん。

人間

吾れは『眞理』なり、
『眞理』より遣はされたる天使なり。

『眞理』より照りかゞやく『光』なり、
迷を照破する『光』なり。
吾れは『道』なり、
吾が言葉を行ふものは道にそむかず。
吾れは生命なり、
吾れに汲む者は病まず死せず。

吾れは救なり、
吾れに賴む者はことごとくこれを攝取して實相
の國土に住せしむ。
天使かくの如く說き給へば
天の童子また重ねて問ふ。
『師よ、人間の本質を明かになし給へ。』

天使答へたまはく——

人間は物質に非ず、

肉體に非ず、

腦髓細胞に非ず、

神經細胞に非ず、

血球に非ず、

血清に非ず、
筋肉細胞に非ず、
それらすべてを組み合せたるものにも非ず。
汝ら、よく人間の實相を悟るべし、
人間は靈なり、
生命なり、

不死なり。
神は人間の光源にして
人間は神より出でたる光なり。
光の無き光源はなく、
光源の無き光はなし。
光と光源とは一體なるが如く

人間と神とは一體なり。
神は靈なるが故に
人間も亦靈なるなり。
神は愛なるが故に
人間も亦愛なるなり。
神は智慧なるが故に

人間も亦智慧なるなり。
靈は物質の性に非ず、
愛は物質の性に非ず、
智慧は物質の性に非ず、
されば、
靈なる愛なる智慧なる人間は、

物質に何ら關はるところなし。

まことの人間は、

靈なるが故に、

愛なるが故に、

智慧なるが故に、

生命なるが故に、

罪を犯すこと能はず、
病にかゝること能はず、
死滅すること能はず、
罪も、
病も、
死も、

畢竟汝らの惡夢に過ぎず。
汝ら生命の實相を自覺せよ。
汝らの實相たる『眞性の人間』を自覺せよ。
『眞性の人間』は神人にして
神そのまゝの姿なり。
滅ぶるものは『眞性の人間』に非ず。

罪を犯すものは「眞性の人間」に非ず。
病に罹るものは「眞性の人間」にあらず。
地上の人間よ、
われ汝らに告ぐ、
汝ら自身の本性を自覺せよ。
汝ら自身は「眞性の人間」にして、

そのほかの如何なるものにも非ず。
されば人間は眞理の眼より見る時は
罪を犯す事能はざるものなり、
病に罹る事能はざるものなり、
滅ぶること能はざるものなり。
誰か云ふ「罪人よ、罪人よ」と。

神は罪人を造り給はざるが故に
この世に一人の罪人もあらず。
罪は神の子の本性に反す、
病は生命其自身の本性に反す、
死は生命其自身の本性に反す、
罪と病と死とは、

畢竟存在せざるものを夢中に描ける妄想に過ぎず。

實相の世界に於ては

神と人とは一體なり、

神は光源にして

人間は神より出でたる光なり。

罪と病と死とが
實在すると云ふ惡夢を、
人間に見せしむる根本妄想は、
古くは、
人間は塵にて造られたりと云ふ神學なり。
近くは、

人間は物質にて造られたりと云ふ近代科學なり。
これらは人間を罪と病と死との妄想に導く最初の夢なり。
この最初の夢を摧破するときは
罪と病と死との
根本原因は摧破せられて

その本来の無に歸するなり。
汝ら「生長の家」を讀んで眞理を知り病の癒ゆるは
この最初の夢の摧破せらるゝが故なり。
最初の夢無ければ
次の夢なし。
悉く夢なければ本来人間清淨なるが故に

罪を犯さんと欲するも
罪を犯すこと能はず、
悉く夢なければ自性無病なるが故に
病に罹らんと欲するも
病に罹ること能はず、
悉く夢なければ本来永生なるが故に死滅す

ること能はず。

されば地上の人間よ

心を盡して自己の靈なる本體を求めよ、

これを夢と妄想との産物なる物質と肉體とに求

むること勿れ。

キリストは

「神の國は汝らの内にあり」と云ひ給へり。
誠に誠にわれ汝らに告げん。
「汝らの内」とは汝ら「人間の自性」なり、「眞の人間」なり。
「汝らの内」即ち「自性は」神人なるが故に
「汝らの内」にのみ神の國はあるなり。

外にこれを追ひ求むる者は夢を追ひて走る者にして
永遠に神の國を得る事能はず。
物質に神の國を追ひ求むる者は
夢を追うて走る者にして
永遠に神の國を建つる事能はず。
キリストは又云ひ給へり、

『吾が國は此の世の國にあらず』と。
此の世の國は唯影にすぎざるなり。
常樂の國土は内にのみあり、
内に常樂の國土を自覺してのみ
外に常樂の國土は其の映しとして顯現せん。
内に無限健康の生命を自覺してのみ

外に肉體の無限健康は其の映しとして顯現せん。

人間の五官はたゞ『映しの世界』を見るに過ぎず。

『映しの世界』を淨めんと欲すれば心の原版を淨めて

迷の汚點を除かざるべからず。

われ誠に物質の世界の虚しきを見たり、

物質の世界が影に過ぎざることを見たり。
われはまた人間が神より放射されたる光なる事
を見たり。
肉體はたゞ心の影なる事實を見たり。
汝ら、物質は移りかはる影にすぎざること
恰も走馬燈に走る馬の如し。

されば、影を見て實在となすことなかれ。
人間眞性はこれ神人、
永遠不壞不滅の靈體にして
物質をもつて造り固めたる機械にあらず、
また物質が先づ存してそれに靈が宿りたるもの
にもあらず、

斯くの如き二元論は悉く誤れり。
物質は却つてこれ靈の影、心の産物なること、
恰も繭が先づ存在して蠶がその中に宿るには非
ずして、
蠶が先づ糸を吐きて繭を作り
繭の中にみづから蠶が宿るが如し。

人間の眞性は先づ靈なる生命にして
心の糸を組み合せて肉體の繭を造り
その繭の中にわれと吾が靈を宿らせて、
はじめて靈は肉體となるなり。
汝ら明かに知れ、繭は蠶に非ず、
然らば肉體は人間に非ずして、

然らば肉體は人間に非ずして

人間の繭に過ぎざるなり。

時來らば蠶が繭を食ひ破つて羽化登仙するが如く、

人間もまた肉體の繭を食ひ破つて靈界に昇天せん。

汝ら決して肉體の死滅をもつて人間の死となす勿れ、

人間は生命なるが故に

常に死を知らず。

想念に従ひ
時に従ひ
必要に従ひて
肉體と境遇とに様々の狀態を顯せども、
生命そのものは病むに非ず、
生命そのものは死するに非ず、

想念を變ふることによつて
よく汝らの健康と境遇とを變ふること自在なり。
されど汝ら、
つひに生命は肉體の繭を必要とせざる時到らん。
かくの如きとき、
生命は肉體の繭を食ひ破つて

一層自在の境地に天翔らん。

これをもつて人間の死となすなかれ。

人間の本體は生命なるが故に

常に死することあらざるなり。

かく天使語り給ふとき、

虚空には微妙の天樂の聲聞え
葩は何處よりともなく雨ふりて、
天の使の說き給へる眞理をば
さながら稱ふるものゝ如くなりき。

（聖經終）

願はくは此の功徳を以て普ねく一切に及ぼし、

我等と衆生と皆俱に實相を成ぜんことを。

實相を見

（一）

神はすべてのすべて、
神は完き生命、
神は完き叡智、
神は完き聖愛。

すべてのものゝ内に、
神の生命は生くる、
神の叡智は生くる、
神の聖愛は生くる。

神はすべてにして、
すべて一體なれば、
よろづもの皆共通の
ちから是を生かせり。

天地の創造主は、
唯一つの神にませば、
天地はたゞ一つに、
いと妙に調和満つる。

吾れ坐す妙々實相世界
吾身は金剛實相神の子
萬づ圓満大調和、
光明遍照實相世界。

歌るず

（二）

神は生命にして、
吾れは神の子なれば、
吾れはすべてを生かし
すべては吾れを生かす。

神は愛にして、
吾れは神の子なれば、
吾れはすべてを愛し、
すべては吾れを愛す。

神は智慧にして、
吾れは神の子なれば、
吾れはすべてを知り、
全てのもの吾れを知れり。

神はすべてにして、
吾れは神の子なれば、
吾れ祈れば天地應へ、
吾れ動けば宇宙動く。

吾れ坐す妙々實相世界
吾身は金剛實相神の子
萬づ圓滿大調和
光明遍照實相世界。

"KANRO NO HŌU" Published
By The Kōmyōshisō-Fukyūkai
Tokyo, Japan.

昭和十二年五月二十九日印刷
昭和十二年六月三日發行

東京市淀橋區柏木三丁目七六
著者 谷口雅春

東京市豐島區千川町三ノ四三三六
發行所 服部仁郎

東京市小石川區白山御殿町十八
印刷者 大居倉之助

東京市京橋區銀座五番地
發行所 株式會社 光明思想普及會